



中国日本商会

今どきコラム-147

中国雑談

常州の GDP

公式アカウント「秦朔友人グループ(秦朔朋友圈)」で常州への団体取材旅行が組織され、私もこれに参加した。実際に行ったのは常州市金壇区で、これは私にとってかなり意外だった。

私の母は、1948年ごろに金壇を去って上海に行き、父と結婚し、1952年に一家で北に向かって、私は北京で生まれた。1960年の大飢饉のときに母は生まれたばかりの私を連れ、金壇に戻り、そこで大飢饉の時代をなんとか乗りきった。大学に入った後の1980年にも一度金壇に行ったが、当時村のほとんどが茅葺きの家であり、とても貧しかった。

飢饉をどう乗りきったかについては、私はほとんど知らない。大学時代に見た金壇はとても貧しく、想像を超えるほどだった。その後もそこに行ったことはあるが、しょせん村の中を歩き回っただけで、金壇についてはほとんど何の知識もなかった。

私は常州高速鉄道駅から車に乗り、高速道路を走って金壇茅山東方塩湖城に到着した。ここは私が見るところ、箱根や軽井沢のような場所で、印象の中の金壇とはまったく違った。飲食の面では、上海料理のように甘過ぎということも、南京料理のようにしょっぱ過ぎということもなく、ずっと母の作る料理を食べてきたせいなのか、とても私の口に合った。

高速道路の両側に立ち並んでいるのはほとんどが太陽電池や新エネルギー関連の工場だった。上海・蘇州・無錫と比べると、工業経済の発展がわずかに立ち遅れていたため、ちょうど新エネルギーの発展チャンスに乗ることができたのかもしれない。電池企業の「蜂



巢能源（エネルギー）」を見学し、常州の「天合光能（エネルギー）」も見学した。このような新エネルギー企業はすべて民営で、強い技術力をもつか、国際化を比較的早くから行っているかで、技術革新・グローバル化により技術および市場における優勢を維持しており、今でも発展の勢いは衰えていない。

北京や上海で見かける官僚は4、50歳の人が多く、基本的に彼らの発表や指示に耳を傾けるだけだ。しかし金壇の官僚はととても若く、ほとんどの人が30にも届かないか、30ちょっとで、彼らは記者に外の世界についての話を聞きたがり、金壇あるいは常州についての紹介はさほど多くなかった。金壇の官僚は多くを語らなくても、そのリゾート地のような環境を見て、最新の工業企業を見れば、ここでの生活や仕事が快適であろうことは、どんな長大な論説をもって語るよりも明らかだ。

常州のGDPを調べてみると、2023年には1兆元を超えている。一人当たりのGDPは、無錫が20万6千元、蘇州が19万元で、常州は18万8千元、南京は18万3千元に過ぎない。産業配置からみると、今後一人あたりのGDPで蘇州を超えることは大いにあり得る。

常州は真新しい発展モデルをもつ現代工業によって貧困から抜け出し、経済的に長い成長態勢にあるといえるだろう。

(chenyan@jpins.com.cn)